

価値観の重層性

児玉 徳美

1. はじめに：意味と価値観の関係

われわれは通例ことばを介して意志の疎通をはかる。相手の意図や主張を理解し、それに納得したり反対する。ときには相手の意図や主張が理解できなかつたり、解釈が食い違ったりする。ことばを介しての理解・反発・誤解や思考はことばに埋め込まれている意味や価値観を通して生まれる。

意図や主張は意味に託して伝達される。意味は語・句・節・文から談話や言説に至るあらゆるレベルの形式と結合する。同じレベルに属する要素の意味や形式は相互に依存し、他の要素との関係で各要素の同一性や差異が決定される。例えばhorseという語の意味はhorseと呼ばれる動物の形態がいかに違っていても、cowやsheepなどと混同されることがない限り、「馬」として機能する。

ことばによって世界を記述しようとする、現実世界は境界の判然としない無限の広がりをもつため、有限個の言語記号を用いて無限のものを記述することになる。その結果、言語記号の形式や意味に解釈の幅や柔軟性をもたせざるをえない。これは文レベルにおいても同様である。文は形式上、平叙文・疑問文・命令文などの種類に分類されるが、文が表す意味は陳述・質問・命令に限られるわけではない。コミュニケーション機能を果たすためには、それぞれの形式に多様な解釈を必要とする。

言語記号が映す世界は人間の思考が対象とする全域にわたるだけに、記号の柔軟な解釈は広範囲に、かつ多様な形で行われることになる。意味解釈が文脈と関係しながら、どのように行われるかをみてみよう。

- (1) a. 死： 死の判定が法・医学・宗教・哲学などのどの領域であるか / 死の原因が病気・他者・自己によるものか / 死の対象が肉親・他人・ペットなどのいずれであるのか、など
b. われわれ意識 (we-ness)： 家族・友人・会社・地域・国家・民族・世界・利益集団などのいずれを重視するのか / その意識は個人のものか集団のものか / 意識を言動に表す際の表現法の違い、など
- (2) a. 太郎は1年前の太郎ではない。 / 昔の太郎と変わらない。
b. 太郎は昨日と同じ12時発のバスに乗った。
- (3) He's coming toward us.
a. こっちへ来るよ。 告知
b. こっちへ来るぞ。 警告
c. こっちへ来るね。 確認
d. こっちへ来るさ。 予想
e. こっちへ来るわよ。(女性からの)告知 内田(2002)

われわれが死を語るとき、(1a)の 内の文脈情報のうちいずれを重視するかによって「死」の意味が違ってくる。同様に「われわれ」ということばを用いるか否かはともかく、「われわれ意識」の意味は(1b)の内の文脈情報によって違ってくる。(2a)は同じ「太郎」が太郎であったり、なかったりするが、これは「太郎」に身体・性格・行動など多様な属性があり、その一部の属性が同一であったり変わったりするにすぎない。(2b)の「同じバス」は「物理的に同じバス」と解釈されることもあるが、通例は他の時間に発車するバスとの対比で昨日と「同じ12時発のバス」と解釈される。(3)の英語は(3a-e)の 内の発語内行為 (illocutionary act)を果たしている。実際に「予告する」「警告する」「確認する」などの表現が用いられていないが、語り手は 内の意図的行為を果たしている。このような発語内行為の意図は英語では明示されず、しばしば文脈に

よってデフォルト解釈されるが、日本語では下線部の文末助詞で明示されることが多い。何を明示的に語り、何を語らないでデフォルト解釈にゆだねるかは諸言語間でしばしば一致するが、時には言語によって異なることもある。(2a,b)のデフォルト解釈はどの言語においても普通であるが、(3a-e)は言語によって異なる。語から文において多様な解釈や価値観が埋め込まれるとすれば、文と文を積み重ねた談話や言説にも同じことがいえる。

かつてSaussure (1916:155-169)は諸概念間の関係や諸概念(の要素)と現実世界を結ぶものとして価値(valeur)という概念を導入した。価値は記号体系内で相互依存関係にある各要素が同一であるか否かを決定する尺度である。例えば日本語の音素の /i/ は /a, u, e, o/ との相互依存関係において決定され、英語の /i/ は /a, e, a, ə, æ, o, u/ などとの相互依存関係において決定される。日本語の音素 /i/ と英語の音素 /i/ は実質上ほぼ似たものであるが、両者は異なる価値をもつため異なる音素とみなされる。意味においてフランス語のmoutonは「羊」と「羊肉」を表すが、英語のsheepは「羊」しか表さない。moutonとsheepは「羊」では同じ意味を表すが、両語が同じ価値をもつわけではない。

日常語の「価値」は「希少価値」「市場価値」「価値を認める」などからうかがえるように、他の要素との関係で相対的な交換比率をさす。その点、Saussureのいう「価値」とそれほど大きな隔たりはない。いずれも価値は相互に依存する要素や意味の差異・対立関係を決定する尺度である。個人や社会が物事にどのような価値を置くかについては一定の体系があり、この価値の体系が「価値観」と呼ばれる。要するに、「価値」は言語の最小単位の音素から談話における物の考え方に至るまで、あらゆるレベルの言語表現に関与している。「価値」と「意味」は必ずしも常に一致するわけでもなく、同義でもない。価値に基づいて言語の多様な意味や形式の差異対立が確立される。また意味上どの価値を重視し、無

視するか の 価値観 は 個人 ・ 社会 や 言語 によって 異なる 。

言語分析においては各要素の意味が他の要素との関係で同一性や差異を示す条件（価値）が何であるかが常に区別される。例えば日本語の取り立て詞の「は」は多数の要素から特定の要素を取り立てる点では同じであるが、主題と対比の2通りの意味を表す。両者の意味上の違いは不特定多数の中からの取り立てか、特定多数の中からの取り立てかであると区別される。

日常生活において話し手はことばを介してコミュニケーションをする際、例えば(1)-(3)の意味の違いを区別するが、その違いが文脈との関係で生じることを明確に意識しているわけではない。同様に、ことばに埋め込まれている価値観の違いが区別されるが、話し手はその違いをいちいち点検することもない。聞き手は必ずしも常に話し手の意味や価値観を意識しているわけでもなく、逆に無批判に受け入れるわけでもない。聞き手が話し手と似た意味や価値観をもつ場合、自らの意味や価値観をあまり意識しないで、なかば無意識のうちに話し手の語る世界に誘導されたり、話し手の主張に賛同する。しかし、話し手の意味や価値観が聞き手のそれと大きく異なる場合、その違いが意識上顕在化し、聞き手は話し手に異議をさしはさんだり反発したりする。意味や価値観はことばと密接に結合し、日常生活で隠然たる力を有している。

人間のふるまいは価値によって支配され、どのようなふるまいにも多様な価値が幾重にも埋め込まれている。本稿の目的は、人間のふるまいのうち、主としてことばに現れる価値観を分析することである。まず初めに、重層的な価値観がことばにどのように埋め込まれているかを探る。次に、価値観の違いによって何を語り、何を語らないかを考察する。価値観の多くは時代とともに変わっていく。価値観が将来どのように変わるか、その行方を予測することは困難であるが、価値観が今日どのような要因で変わりつつあるかを捉えることは可能である。最後に、今日の

い」に相当する語がない。(4)の一部の特性に相当する語として子どもに対してcuteやprettyが用いられるが、大人へのほめことばとしては好まれない。いずれも子どもっぽさや大人としての魅力の欠如を含意するためである。

(5)は日米での契約行為の違いを示したものである。契約行為はアメリカでは(a, b, c)の右辺の特性から形式的なものになり、日本では左辺の特性から非形式的なものになりがちである。契約の概念や慣行の違いは文化の違いでもある。

(6)は言語文化の多様性を示す最も一般的な特性軸である。日本語はインドヨーロッパ語族と違って複雑な自称詞・対称詞や敬語をもつ。また英語でthis-that, here-thereの二分法に対して、「こ・そ・あ」の三分法をもち、英語なら同じgiveですむところを「やる」「くれる」と区別したりする。いずれの特性も相手が誰であるか、対象が何であるかを前提にしており、日本語は 対象依存性 特性軸に敏感(+)でその左辺に位置し、インドヨーロッパ語族は右辺に位置する。この一般的な言語特質が、インドヨーロッパはともかく、そのまま日本文化の特質にもなっている。そのことは「和を以って貴しとする」、名刺の交換、Japanese smile、甘えの構造、察しの文化など日本(人)の特質とされる多様な行動様式がすべて相手(他者・対象)の存在を前提にし、相手との関係で相対的に自己が規定されていることから実証される。

(4)-(6)の特性軸はことばや行為を特徴づけるものとしては一般的なものである。より具体的には(4)の場合、「かわいい」という話し手の年齢・性、対象となるものが誰・何であるか、話しことばが書きことばかなどの指定が必要になる。(5)の場合も契約当事者の親密度や契約作業の規模などにより条件が違ってくる。(6)は言語文化の多様性を特徴づける1つの特性にすぎない。対象依存性 特性軸はウチとソトの関連で(1b)のわれわれ意識とも関係している。またインドヨーロッパ語族間の異同やその文

化との関係の特徴づけるにはさらに多くの特性を抽出する必要がある。そのような不十分さはあるが、本節で強調したいことは、どのような言語表現や行為にも多様な価値（観）が重層的に結合しているということである。

重層的な価値（観）の一部を通常と異なる形で特別に重視したり軽んずることにより意図が正確に伝わらなかつたり誤解を招いたりする。つまり、価値（観）が正確にことばに表現されないときは、両者の間にギャップが生まれ、言語表現のどこかに論理矛盾が出てくる。論理的に矛盾を解消するためには言語表現を変えるか、価値判断を修正する必要がある。

3．何を語り、何を語らないのか

3.1. 2004年前半期に現れた政治上の言説をめぐって

政治の問題には通例何らかの価値観が強く現れる。政治上の主張をめぐって激しい議論がしばしば交わされるのもそのためである。話し手も聞き手も互いに価値観を突き合わせ、自分の主張を支える価値観や世界観の重要性を説く。互いに語る内容も違ってくる。本節は2004年前半期の日本に現れた政治上の言説を考察する。

2004年4月にはイラクのファルージャで人質になった日本人3人の行動をめぐって「自己責任」をキーワードに国内で非難合戦が起こった。そこでの主張・論拠・視点はおよそ次のようなものであった。

- (7) a. 人質になった者は政府の退避勧告に従わないで行動した結果に対して自己責任をもつべき / 人質に対して取るべき政府の役割は何か？
- b. 人質の被害者家族が犯人の要求である「自衛隊撤退」に応じるよう政府に懇願したことの是非 / 自衛隊のイラク派遣への賛否

- c. NGO・フリーカメラマン・ボランティア活動家としての人質の活動の評価 / 座して戦況を見るだけでよいのか、戦争報道に片寄りはないのか
- d. ファルージャ市民を巻き込んだアメリカの攻撃の是非 / イラク戦争の是非
- e. 人質をとった犯人集団の行為・要求の是非 / イラク人の抵抗のうち何をテロ・レジスタンス・正当防衛とみるか

人質事件をめぐるマスメディアの論争には大きく3つの特徴がある。第1は、多様な意見が出たが、その論拠は(7a-e)の一部のみを強調したもので互いに合意点を見出せなかったことである。第2は、人質3人に対して政府を含めて「自己責任」を追究したのは日本だけで、同じように人質をとられたイタリア・スペイン・韓国にはそのような主張がなかったことである。日本で「自己責任」をめぐって賛否両論の議論が起きていたとき、フランスのル・モンド紙は外国にまで行って人助けをしようとした若者たちに対して謝罪や救出費弁済を求める「無理解と激昂と怒声」が日本に広がっていることが不可解であるという記事を載せた。アメリカのパウエル国務長官でさえ「日本は彼ら(人質)の行為こそ誇りにすべき」と述べていた。第3に、4月15日に人質3人は無事解放され、事件そのものは解決したが、(7a-e)のいくつかの論点はイラク問題の核心に迫るものであるにもかかわらず、その後はほとんど議論されていない。

次に年金問題について考えてみよう。政府は2月に「抜本的」と呼ぶ年金改革案を国会に提出した。4月より国会審議に入り、政府案は5月11日に衆議院を通過し、6月5日に参議院通過により成立した。この間、与野党とも7月11日に予定されていた参議院選挙に向けて攻防を続けた。各種の世論調査では6 - 7割の者が法案に反対していたが、最終的には強行採決で成立した。法案への反対理由は次のようなものであった。

- (8) 政府の年金改革案への反対理由

- a. 将来の給付率・負担率の算定基準が不明確である。
- b. 世代間・職業間で不公平があり、制度としては年金の一元化を指向すべきである。
- c. 国民年金を払うべき者のうち約4割の未加入・未納者があり、年金制度が空洞化しているのに、現行の制度を改善する方向が示されていない。
- d. これまでの年金積立金が乱用されている。

政府改革案は厚生労働省を中心に起案されたが、改革案が成立した直後の6月10日に厚生労働省は例年の慣行に従い、前年度の出生率を発表した。そこでは出生率が2002年の1.32%から2003年に戦後初めて1.3%を割り、1.29%に落ち込んだと報告した。成立した改革案では2003年の出生率は前年と同じ1.32%と推定されていた。少子化傾向は予想以上に進んでいた。推定と異なる実態は改革案の骨格をなす年金給付率に大きな影響を与え、(8a)の算定基準そのものの不確かさが露呈された。これには後日談がある。野党から厚生労働省に対して、国会審議中に政府に不利になる情報開示を控えるため「発表を意図的に遅らせたのではないか」の質問主意書が提出され、それへの答弁書が6月22日に公表された。そこでは1.29%の出生率は改革案が国会を通過する12日前の5月24日にすでに判明していたという。この公表を受けて坂口厚生労働大臣は「私にはその報告はなかった。国会の状況がどうであろうと、出生率は早く公表することが大事である」とコメントした。厚生労働省と大臣はまるで無関係であるかのように、互いに相手方に非があるとみなしている。意図的に出生率を遅らせた責任者はどこにいるのであろうか。

改革案の成立後1ヶ月ほどして条文に30箇所あまりの誤り(文・語句の脱落など)があることが判明し、厚生労働省は担当職員に厳重注意などの処分を発表した。これも必要であろうが、出生率隠しという、これより大罪をおかした犯人の罪は問われないままである。

年金改革案が審議されている最中、国会で議論している議員の多くが過去において国民年金に加入せず未納であることが明らかになった。一時、改革案の中身の審議よりむしろ議員の未納・未加入問題が争われた。

(9) 国会議員の国民年金への未納・未加入問題

- a. 自己の老後の保障のため加入は任意的である。
- b. 世代間の相互扶助のため加入は義務的である（法律上、国会議員は1986年まで任意的。ただしそれ以後または議員になる前は義務的）
- c. 未加入・未納問題は個人情報であり、公表は控えるべきである。

(10) 小泉首相の「はぐらかし」と「開き直り」

- a. ロンドン大学留学後（69年8月から70年3月まで）、国民年金に加入していなかったことに対して「当時は全く気づかなかった。今指摘されて、ああ、やっぱり義務だったのかな」と思う。
- b. 帰国後、不動産会社社員になって厚生年金に加入したが、勤務実態はなく、「太っ腹な社長が選挙に当選することが仕事だといってくれた。人生いろいろ、社員もいろいろ...。」
- c. 自民党として国民年金の未加入・未納者を公表しない理由として「自民党は自由と民主だから...。」

国民年金をめぐる、自民党を除く各党は(9b)に従って、これまでに未加入・未納の期間があった国会議員名を公表した。しかし自民党は国民年金がまるで民間会社の生命保険でもあるかのように任意的である(9a)とか、(未)加入問題は個人情報である(9c)と称して公表を拒否した。国会議員の資産公開が義務づけられている現在、個人情報であるはずもない。小泉首相も未加入・未納の時期があったとする記事が改革案の審議中に週刊誌に出た。首相はこれは誤報であり、改革案の提案者として過去に国民年金の未加入・未納時期はなかったと述べていたが、二転三転して強行採決の直前（6月3日）に(10a)のように義務違反を認めた。

(10b)は不動産会社社員になって以後、国民年金にも加入していたとする弁明である。「人生いろいろ、社員もいろいろ」とはいえ、勤務実態がなく厚生年金に加入していることは一種の詐取行為にあたる。しかし政府は早々と6月8日に当時の書類が残っていないため勤務実態についての確認が不可能であるとして調査を打ち切った。

7月の参議院選挙の結果に簡単にふれておく。選挙前、参議院自民党の青木幹事長は改選議員数の51を下回れば「小泉内閣は『死に体』になり、首相は総辞職するのが筋だ」と豪語していた。51は6年前の参議院選挙大敗時の議席数であり、3年前には64を獲得していた。今回51を下回ることはないと確信していたためであろう。衆議院自民党の安部幹事長も51を下回れば自ら責任をとると明言していた。選挙結果は民主党より少なく、51を下回った。しかし両幹事長は前言を撤回。不思議なことに、敗北を認めた青木幹事長はその職を辞し、自民党参議院団を束ねる参議員会長に昇格した。小泉首相は公明党を含む与党が過半数をとり、政府の政策は支持されたと敗北を認めなかった。

本節は半年の間に日本に現れた政治上の言説をみてきたが、それぞれの言説や議論は決して特異なものではない。日本の「言説の秩序」に忠実に従っている（日本の「言説の秩序」について詳しくは児玉2004a,b参照）。(7)での論点が入質解放後ほとんど議論されていないが、これは議論において問題の本質が十分確認されず、重要な論点が継承されなかったためである。(8)は論点が明確になっていながら十分に議論されていないまま終わっているが、これは立法府では議論より「数は力なり」の論理が優先するためである。改革案成立後の出生率の公表問題は情報が隠蔽され、責任の所在も不明確であることを立証している。(9)(10)では詭弁やはぐらかしが横行し、選挙時の言動に対しては誰も責任をとらない。すべての問題は日本の「言説の秩序」の特徴といえる「あいまいさ」から派生している。

もちろん、情報隠し、詭弁、「あいまいさ」は日本に限らない。より重要なことは(7)-(10)にみるような現象がなぜ起きるのかを明らかにすることである。

3.2. 語る内容がなぜ違うのか

主張の相違については2つのケースが考えられる。1つは事態の推移や認識において同じ個人・集団の考え方が変化する場合であり、あと1つは異なる個人・集団の考え方の違いである。いずれも価値観の違いによる。まず第1のケースからみてみよう。

(11) ブッシュ大統領の主張

- a. 2001年9月：「テロとの戦い」の宣言
- b. 2002年1月：「悪の枢軸」(議会への一般教書)
- c. 2003年3月以後：イラク戦争の大義の揺れ

9.11事件とのつながり 大量破壊兵器の放棄 イラクの民主化

(12) ギトリン(2002)の主張

反戦を主張する左派がアメリカのあらゆる政策に反対することは今や「時代遅れで的はずれ」である。自分は今や報復戦争を支持し、愛国を唱える。

9.11事件は人類がこれまで経験したことの無い大規模なテロ行為であり、アメリカはもちろん世界にとって大きな衝撃であった。Graham et al (2004)によると、(11a)の演説はローマ法王アーバン(Urban)世が最初の十字軍出兵を訴えた演説(1095)、エリザベス世によるスペイン開戦の演説(1588)、ヒトラーによるオーストリア併合直前の国会演説(1938)に匹敵するとしている。いずれも大義のためには死をも覚悟して「武器を取れ」と呼びかけたものである。われわれは今日歴史的転換点にいるのかもしれない。社会学者ギトリンは1960年代後半期にはベトナム反戦世代のシンボルであり、Gitlin(1995)ではアメリカの人種・性・宗

教・階級を超えた融合を唱えていたが、9.11事件後、(12)にみられるように、大きく主張を変えていった（詳しくは児玉2002:223参照）。(11a)の延長線上に(11b)がある。「悪の枢軸」とはアフガニスタンのタリバンとアルカイダの撲滅後、一般教書の中でテロを支援する国家として名指しした北朝鮮・イラン・イラクの3国である。「悪の枢軸」に立ち向かう一環としてブッシュ大統領は2003年3月17日にイラク攻撃の演説をした。米英の合同軍は国連の決議を経ないまま3月20日攻撃を開始した。よしあしは別にして、(11a)から(11c)のイラク戦争突入までは一貫して戦略を拡大していった。しかし、(11c)のイラク戦争の大義は時の経過とともに変化した。イラクが9.11事件を起こしたアルカイダなどのテロを支援したことに対して報復することであり、さらにイラクは保有する大量破壊兵器をテロに渡すかもしれない危険な国であり、その放棄を迫るものであった。その後、イラクとアルカイダなどのつながりや大量破壊兵器の保有が疑わしくなるにつれて、「ゴールポストが移動する」かのように、イラク戦争の大義はフセイン独裁政治に抑圧されていた「イラクを民主化する」ことに変わっていった。

米英両国は議会内にイラク戦争に関する超党派の独立調査委員会を設け、それぞれ2004年6月と7月に詳しい報告書を出した。そこでは9.11事件を防ぐことができなかった原因を含めて、イラクとアルカイダの間に直接の協力関係がなかったこと、さらにはイラクの大量破壊兵器の保有が疑わしいことを報告している。それと対照的に、日本では次のような安穩な発言が堂々とメディアに登場している。

- (13) a. 戦争の大義なんかどうでもよい。そんなことは暇な歴史学者があとから調べればいい。 「産経抄」(『産経新聞』2004年1月29日) / 石原慎太郎と西村真悟の対談(『諸君』2004年6月号)
- b. ほんとの保守というのは、論理の一貫性なんか気にしちやいけない。 ある政治学者の発言(『月刊 現代』2004年6月号、

p159)

(13a)は戦争の大義なんて跡づけのものであり、重要なものではないというが、これではなぜ戦争を起こすかについて何の答えにもならない。(13b)はかつての左翼が硬直したイデオロギーに縛られていたことを批判し、現実を直視して柔軟に対応すべきというのであれば、1つの主張であるが、そういう意味ではない。保守は「論理の一貫性なんか気にしちゃいけない」、大義なんかなくていいといっており、論理破綻しているのは保守ではなく、むしろ発言者の主張である。「保守」とは、本来、何かを守ろうとするものであり、いったい何を守ろうとしているのか全く分からない。

イラク戦争についての反応はイラク内での事態の変化・国の政策・既成事実などの要因によって変化していく。各種の世論調査によると、例えばイラクへの武力行使の支持率はブッシュ大統領の演説（2003年3月17日）前、アメリカで約60%、英国で約40%あったが、攻撃開始（3月20日）後はいずれも約10%上昇した。しかしそれから1年後の2004年3月には、イラク戦争の支持率はアメリカで50-60%、英国で約40%に下がった。参加しなかったドイツ・フランス・ロシアでは80%以上がこの戦争に参加しなかったことを正しいと答えている（『朝日新聞』2004年3月17日、25日参照）。各国にはイラク戦争に対して今なお大きな「溝」がある。日本でもイラクへの自衛隊派遣について政府が基本計画を決定した時（2003年12月9日）、派遣に反対するほうが多かたが、先遣隊派遣後（2004年1月）は逆転して賛成者が過半数に達した。しかし2004年6月後の国連軍への参加についても世論は割れている。

事態の変化に応じて主張や価値観が変わることは不思議でなく、ある意味で当然でもある。しかし(13a,b)のように言動の理由づけや道筋まで放棄するのは論外である。主張や価値観を変える言動にはそれなりの説明が必要である。先ほど(11c)との関係でみたように、米英両国は議会内

に独立調査委員会を設け、イラク戦争の大義が正しかったか否かを正面から調査し、議論してきた。両国はイラク戦争を始めた当事国だけに、それは当然であるともいえる。米英両国でなくても、イラク戦争に参加しているオーストラリア政府はイラクが大量破壊兵器を保有していると思って戦争に参加したが、米英の情報に頼りすぎ、オーストラリアとしての調査が不十分であったと2004年7月に言明した。9月には米国のパウエル国務長官もイラクに大量破壊兵器があるとしたことはまちがいであったと認めた。アナン国連事務総長も9月の国連総会で「イラン戦争は国連の承認を得たものではなく違法だった」と断じた。ついに10月6日にはイラクで大量破壊兵器の捜索に当たってきた米政府調査団が、戦争前のイラクに大量破壊兵器はなかったという最終報告書を発表した。この報告書はすでに公表されていた議会内の独立調査委員会の最終報告書の結論とも一致する。英国のブレア首相は議会で米政府調査団が発表した最終報告が事実であることを認め、開戦当時の認識に誤りがあったことを謝罪したが、ブッシュ大統領は最終報告書の実事実を認めながらも、フセイン政権を排除しなければ再び大量破壊兵器の開発に手を染める危険があったとして戦争をなお正当化した。イラク戦争の大義は(11c)からさらにゴールポストが移動している。その背後には「テロの脅威には国連の承認がなくても先制攻撃できる」というブッシュ政権の戦略がうかがえる。

しかしこうした動きと日本の動きは対照的である。日本はかつて第二次大戦の大義を政府が検証したわけではない。首相の靖国参拝が国の内外においていまだに論争されているが、死者を慰霊すること自体が問題ではない。問題は死者の中に戦争責任者が含まれていることにある。ドイツの首相や大統領がヒトラーの墓に詣でることなど、とても考えられない。大戦中、敵対していた諸国間に関係もEUに統合しているヨーロッパと日本をめぐる東アジアは対照的である。大戦の責任の所在をあいま

いにしてきたことが60年後の今も尾を引いている。イラク戦争にしても、イラクがアルカイダなどと協力関係にあったか否か、大量破壊兵器があったか否か調べようがないとか、大量破壊兵器が今後発見されるかもしれないという従来のあいまいな政府答弁はその後も修正されていない。小泉首相は米政府調査団の最終報告を受けて「イラクが国連決議に従って大量破壊兵器保有について自ら『潔白』を証明していたら戦争は起こっていなかった。証明をしなかったため、戦争の正当性が否定されたわけではない」と述べた。開戦時に大量破壊兵器保有による脅威を強調していたことを忘れ、今また何のためらいもなく米国政府の主張に追従しており、自らの「顔」が見えてこない。このようにあいまいな日本政府の見解は、背後では(13a,b)のような発言によって支えられている。大量破壊兵器についての言説は違っても、行動面では米英と同じように自衛隊はイラクにいる。

米英との言説の違いはマスメディアにおいても同様である。大義とされるイラクの大量破壊兵器をめぐって、2004年に入り、米国のメディアは政府の情報に引っ張られ、なぜその主張に異議を唱えなかったのか、なぜまちがった情報を確認しないまま流したのかなどの自己検証をしている。他方、英国のメディアはBBCをはじめ、政府の主張に懐疑的だったものが米国より多く、開戦をめぐって国論を二分したが、米英のメディアがなぜ異なる報道をしたかを冷静に検証している（例えば『朝日新聞』（2004年9月17日）の記事「メディア、なぜ間違えた」を参照）。しかし日本のマスメディアはこうした海外の自己検証を紹介するものの、自らの自己検証はいまだにしていない。イラク戦争への賛否はともかく、大義を検証したり自己の言動への道筋を明らかにしなければならないという意識は日本では希薄であり、欠如している。こうした欧米との違いは何に由来するのであろうか。

ギリシャ語で言語はロゴス（logos）であり、ロゴスはまた理性・論理

であった。言語と論理を不可分とみなす言語観は、ヨハネ伝の冒頭にある「太初（はじめ）に言（ことば）あり、言は神とともにあり、言は神なりき」の一節からもうかがえるように、キリスト教世界に受け継がれていった。これと対照的に、日本にはロゴス観が欠如し、言語は必ずしも論理や真理と一体ではない。元々言語への信頼は薄く、真理へ近づくにはことばを超越し、沈黙へと高められる世界さえつくってきた。今日その代表的なものが河合（1996，2003）である。河合は依言真如より離言真如、無我の境地の魅力を語り、21世紀の世界を解く鍵は「あいまいさ」にあるとまで述べている（詳しくは児玉2004 a 参照）。河合は国際日本文化研究センター所長のあと文化庁長官を務め、その在任中に『「あいまい」の知』（岩波書店、2003年）を世に出している。いかにも日本文化の象徴である。

日本文化が多様なものを受け入れてきたのもこうした価値観と無縁ではない。ことばを介して論理や理論を徹底して追究する伝統が弱く、しばしば能弁より寡黙、競争より共存が尊重される。その結果、言語を超えた心の世界に属する「誠」が政治家から暴力団に至るまで好まれる。「誠」は自己よりむしろ他者に忠実なことを含意する。自己に不誠実であっても他者の意に沿い「共存」ができさえすれば、「誠」は成立する。逆に「内部告発」は内部の不正への自己の怒りに誠実であっても、内部の他者の意に反し「共存」を脅かす場合、しばしば批判される。いずれも(6)の 対象依存性 特性軸に敏感な日本文化の反映である。また日本ではさまざまな神仏が共存し、文字では漢字・ひらがな・カタカナ・ローマ字・アラビア数字・ローマ数字などを自由自在に操る。ある意味で日本の活力の源もこの多様性にある。学問上の理論についても同様である。例えば戦後の言語理論だけでも、伝統文法・構造主義言語学・生成文法・認知言語学が日本で受容されている。すべて外国から輸入された理論であり、それほどの抵抗もなく受け入れられ、一人でその理論を渡り

歩いた者も少なくない。清濁あわせ呑み、判官びいきをし、「盗人にも三分の理」があると鷹揚なところもあるが、その代償として「玉に瑕（きず）」「画竜点睛を欠く」「李下に冠を正さず」などと少しの欠点も見逃さない潔癖さもある。多様な要素に気を配るあまり、罪の大小に対する認識があやしくなり、厚生労働省内の出生率公表問題や年金改革案条文作成者の処分でみたように、大罪が見逃され、小さい罪が罰せられることにもなる。言語への信頼が希薄なだけに、常に論理の一貫性が求められるわけでもない。例えば議場ではその場をうまく切り抜けさえすれば、詭弁やはぐらかしも喝采を呼ぶ。ことばがますます軽くなり、実態を伴わない、時間ふさぎの単なる記号と化している。こうした現象はすべて、§3.1の末尾でみたように、日本の「言説の秩序」である「あいまいさ」から派生し、同時に「あいまいさ」を自己増殖している。

このあいまいさはことばと論理が一体となっているロゴス観の対極にある。河合（1996、2003）が主張するように、ことばを超えたところにこそ真理があるとする世界観である。確かに、ことばは全幅の信頼が置けるほど揺るぎないものではない。ことばそのものが一方で人間の生得的能力に由来し、他方で人間社会からの影響を受けているとすれば、ことばには人間のもつ知力の限界や独善性の性向が埋め込まれていると考えられる。だからといって、すべてを「あいまいさ」にゆだねるのでは何の解決にもならない。「ウザイ、キレル」と称してことばを拒否する現象や(13a, b)のような主張を生むことになる。人間の限界や性向を見極めるには、残念ながら、ことばを介する以外に方法がない。

次に異なる個人・集団の主張がなぜ異なるかについて考えてみよう。個人・集団が違えば、歩んできた環境や歴史が異なり、直接・間接に関与した事物・出来事も違ってくる。主張の背後にある価値観に違いがあるのも当然である。先ほどイラク戦争の評価において世界各国に大きな「溝」があると述べたが、これも価値観の違いによる。

例として「われわれ意識」について考えてみよう。部分的にしる特定の価値観を共有することにより、「われわれ意識」の仲間意識、連帯、アイデンティティ、などが生まれる。われわれ意識も(1b)でみたように、多様な要因からなり、状況により重視される因子が異なってくる。総論的には、だれも共生・共存の意義を認めるが、具体的に自己の、または自己の属する集団の主張や利益が脅かされる場合、自己防衛意識が強くなる。あるいは相手の主張や利益への配慮が希薄になり、ウチとソト、敵か味方か、善か悪か、などの単純な二分法に陥りやすい。ここでの「仲間はずれ」はソト = 敵 = 悪という等式で結ばれる。こうした単純な二分法は(11)との関連でみたように、歴史的に世界の為政者が大義の名のもとに大衆を戦争に駆り出すために採ってきた手法である。価値観や事態は多様な因子からなるだけに、単純に二分する手法が論理的にまちがっていることは明らかである。

人は自己の価値観や信念に基づいて行動する。その際、語りたいたいものだけを語り、語りたくないものには沈黙し、見たいものだけを見て、見たくないものには目を向けない。その結果、個人や集団により語りの内容や主張が異なる。その象徴的な2つの事件が2004年4月末から5月にかけてテレビを通して明るみに出た。

(14) a. イラクのアブグレイブ刑務所内での米軍兵士によるイラク人捕虜の虐待・拷問の映像

b. アルカイダによるイラク内でのアメリカ人ニック・バーグ氏の誘拐・殺害の映像

いずれも残忍で目をそむけたくくなるような映像であった。(14a)の映像は多くのイラク人にとってアメリカ軍による不当な占拠や無差別の市民攻撃と同質のものであり、アメリカの欺瞞や不当性を象徴するものであった。(14b)はそうした不当占拠をしている外国人への報復にすぎないと考えた。他方、多くのアメリカ人は(14b)の映像を見て、イラクはこんな残

忍な殺害が行われるほど混乱の中にあり、今回の戦争もイラクに民主化と人権をもたらすものであると、戦争を正当化しようとした。もっとも、(14a)の虐待拷問は弁解のしようがなく、政府もこれは限られた兵士による例外的なものであると認め、犯行兵士を軍法会議にかけた。軍法会議にかけられた兵士の家族は彼（または彼女）の性格からしてあんな残酷な虐待をするはずがない、これは組織的なもので軍の上からの命令に従ったものにちがいないと、自分の子どもたちを弁護した。それぞれの立場によって主張が違っている。

語りたものだけを語り、見たいものだけを見るという本能的な性向は語られたくないものを語らせず、見られたくないものを見せない情報操作にもつながっていく。イラク戦争開始後治安が悪化し、海外の主要メディアがバグダッドから撤退する中、カタールの衛星テレビ局アルジャジーラはバグダッドに残り、戦況報道を続け国際的な人気を得た。しかし米軍の誤爆によるイラク市民の被害や捕虜になったり戦死した米英兵の映像をしばしば放送し、米英からは厳しい非難を浴びていた。2004年8月には米政府の意を受けてイラク暫定政府がイラクの平和と治安を妨げるとしてアルジャジーラのバグダッド支局を強制閉鎖した。その結果、アルジャジーラは、米軍が2004年4月に武装勢力の拠点になっているとしてファルージャを攻撃した際、その状況を世界に発信したが、11月に米軍が再開したファルージャへの攻撃は発信できなかった。報道統制の下でその後（2005年1月現在）イラクで何が起きているか詳しく語られないまま、状況だけは進行している。このような状況の下で自衛隊が駐屯しているサマワの映像がときに日本のテレビで放映されるが、そのほとんどは自衛隊提供のものである。自衛隊の宣伝映像ともいえるが、テレビ局によっては情報源を明示しないまま流しているところもある。

今日、出来事の多くは映像を通して語られる。20世紀にはラジオの発明が情報伝達の規模と速さにおいてマスメディアに大きな変化をもたら

した。その後、テレビが始めた1953年にChaseはマスメディアの発達
が人間に多くのプラス（幸福）をもたらすだけでなく、多くのマイナス
（不幸）ももたらすとして、その功罪をリストした。Chase（1953:244-247）
が示す功罪の貸借対照表では負債のほうが多いが、その最大の要因は、
「ヒトラーのような人物がマスメディアを利用し、大衆の不安につけ込んで
独裁者の地位につくことができる」という点にあった（詳しくは児玉
1998:196-197参照）。いかに科学技術が発達しても、マスメディアの流す
情報は限定されたものにならざるをえない。情報の送り手は単に情報を
受け手に提供するだけでなく、特定の情報を流すことで統治者を代弁す
ることも当事者の訴えを代弁することもできる。ラジオが存在していな
かったら、ヒトラーも出現していなかったかもしれない。

今日のテレビの普及はある意味でラジオ以上に大きな影響を与えてい
る。ラジオによる情報伝達は日常生活と同じことばによるものであった。
しかしテレビの映像は大脳の言語野より視覚野や聴覚野に訴えることによ
りしばしばことば以上のものを伝えている。テレビ時代の今日、視聴
者は生で見る映像に接し、地球の裏側の出来事も同時進行の形で知り、
出来事の「目撃者」になり、当事者の喜びや怒りや苦痛に共感すること
ができる。しかし強い刺激は繰り返されることでしばしばその効力を失
う。同じ映像に繰り返し接することで共感や倫理観が麻痺し、やがては
単なる「目撃者」の域から一歩も出ず、現実世界に無感動になる危険を秘
めている。

マスメディアが地球規模で展開する中で人間の意識や世界の事態は従
来と変わりつつある。20世紀末には例えば英語の一元化傾向がますます
強くなったが、かつての植民地時代のように、公権力や強制によって使
用言語を変える必要もなくなった。言語ヘゲモニーの下で多くの人が不
本意ながらも「自発的同意」の装いでもって小言語から大言語へ変わっ
ている。21世紀には映像メディアによって人間の感覚や思考回路が変わ

るとしても不思議でない。このことはことばへの信頼や言力（word power）を弱体化させる一因にもなっている。視聴覚による「理解」はことばや活字による「理解」より少ない労力で達せられる。その結果、映像・マンガ・音楽などが好まれることにもなる。この視聴覚中心の領域においても、従来に比べてことばの比重が低下している。今日、映画の多くは怪獣・暴力・SFなどを題材とし、流行歌も歌詞よりリズムが重視される。いずれの領域でも映像や音そのものが注目され、表層的・即物的なものに心を奪われる。そこで用いられることばによるコミュニケーションも現実とかげ離れた荒唐無稽のことが多い。視聴覚情報の波の中でテレビなどの映像に慣れ親しむことにより「目撃者」として出来事を「理解」したつもりになり、やがては無意識のうちに異常なものへの感覚や思考まで鈍化していくのであろうか。視聴覚情報は表面に現れる現象に対してはしばしば言語情報よりはるかに大きな効力を発揮するが、その背後に隠れているものについては必ずしも明らかにしない。言語情報によってしか語れないものが多くあることを忘れてはならない。

4．価値観の変化

重層的な価値観のうち、多くの価値観は時代とともに変わっていく。今後どのような社会や価値観が形成されるか、その行方を予測することは困難である。しかし過去において価値観がどのように変わったかを跡づけたり、今日変わりつつある社会や価値観の姿を捉えることは可能である。世界の潮流として例えば20世紀は「言語の世紀」であるといわれる。確かに20世紀に入り、言語が思想や文化の中で重要な位置を占めるようになった。それまでは17世紀のDescartes以降、人間の精神（心）は、動物や機械と異なり刺激から独立して創造的な働きをし、現実を映す鏡にたとえられ、この鏡に映る映像を正確に表すものが知識であるとみな

された。現実の真理・理性・普遍性・客観性に迫る知識を獲得するためには、いかに鏡をみがきあげるかが重要であった。こうした啓蒙主義的な認識論に対して、Wittgenstein, Heidegger, Deweyなどは異議を唱えていった。彼らは代案として「知の理論」を提出したわけではないが、いずれも精神が知識と等式で結ばれることを否定し、両者をつなぐことばそのものへ関心を寄せ、「言語論的展開」(linguistic turn)をみせた。ここではことばは精神を表示する単なる媒体ではなくなり、ことばの意味が記号体系としてどのように形成されているかが考察の中心となった。ことば(の意味)そのものが固有の組織をもつことになり、ことばを精神や文化と直接結びつけることが否定されていった。その後第二次世界大戦という虐殺・惨劇を経験したあと、ポストコロニアリズムまたはポストモダンにズムが現れている。ここでは普遍性・客観性・真理・理性といった古典的概念を徹底的に疑い、立場や状況により相対的に捉えることで多様性や差異を強調し、普遍の存在さえ否定するものもある(詳しくは児玉2002:209-212参照)。Foucault (1970)のいう「言説」(discours)または「言説の秩序」(ordre du discours)によると、言説とは受動的に単に客体として存在する社会=現実を映すというより、むしろ能動的に社会=現実を生み出し構築するものとなる。(14a, b)の解釈が言説により異なるのもこのためである。今日、ことばと思考や文化との間には間接的なつながりが認められるが、そのつながりは言語の形式上の言語構造を介してより、むしろ意味上の言説(の秩序)を介してのものである(詳しくは児玉2004a参照)。

世界の潮流の波の中で日本においても20世紀後半から21世紀に至る世紀転換期にかけて、社会は大きな変節点を迎えている。ここにはいくつかの要因が重なっている。第1に、前節の末尾で述べたように、映像を含むマスメディアの発達である。第2に、宗教の変化である。古典的概念に疑いをもたれる中で地域や個人による違いが拡大している。一部に

は従来と変わることなく原理主義的に神や仏に帰依する者があるが、多くの人にとっては神や仏の教えが世代を超えて受け継がれることはなく、宗教はもはや精神的支柱となっていない。「神は死んだ」といわれて久しく、今や神の不在そのものに疑問も抱かれぬ。第3に、資本主義の進展に伴ない、産業構造が変化し、高度消費社会や新しい文化状況が出現していることである。第4に、1990年のベルリンの壁の崩壊に象徴されるように、政治イデオロギーの終焉である。もはや唯一絶対の正義や思想はない。このような要因が複合的に作用することによって価値観も変わっていく。

吉本隆明は戦後日本の思想界において多くの問題を提起してきた。膨大な吉本の著作のうち、(15)はその一部である。(16)(17)は吉本が時代の変節点にあたって、社会を捉えなおすことにより自らの立場を変えていった理由である。

- (15) a. 1956 (武井昭夫との共著)：『文学者の戦争責任』(淡路書房)
- b. 1975：『言語にとって美とはなにか』(勁草書房)
- c. 1978：『共同幻想論』(河出書房)
- d. 1981：『心的現象論序説』(北洋社)
- e. 1995：『わが「転向」』(文藝春秋)
- f. 2000 (大塚英志との対談)：『だいたい、いいじゃない。』(文藝春秋)
- g. 2004：『「ならずもの国家」異論』(光文社)
- (16) a. 僕が旧来の「左翼」思想と決別したところがあるとすれば、「大衆」と呼ばれてきた層が、日本の社会の中樞を占めるようになったのではないかという認識から始まった。…60年から80年の間のどこかでとても顕著な日本の大転換のピークがあったと思えてきました。…この変化が社会・文化・経済といったものを根底から変えていったのではないか。 吉本(1995:14)

- b. 「体制 反体制」といった意味の左翼性は必要も意味もないと言っていていいと思います。何か個別の問題が起こった時、ケースバイケースでその都度、態度を鮮明にすればいいだけです。上司が理不尽なことを言ったならば反対することが、いわばその時々「反体制」ということです。 吉本（1995:25）
- (17) a. あらゆる方面から、学生の質が落ちた、落ちたと言われている。文芸ののほうでは作家も批評家も純文学は衰える一方だと言っていたり、あらゆるところで同じような言われ方がされている気がします。文明、文化が発達するというのはそれが高度になることだとすると、現象はそうになっていないじゃないか、サブカルチャー化してひろがっているけど、高度にはなっていないじゃないか。これは不思議なことだと思えるわけです。どう考えたらいいのか自分なりに考えてきましたが、僕は全く反対に考えようと思ったんです。サブカルチャー化してきたというより、いままでは週刊誌の活字にすら縁のなかった大衆が、活字の中に入ってきたということがひとつあるんじゃないか。...こういうサブカルチャー的なものが旺盛になって種類も多種類になってきたことは当然だと思います。社会的に言うと資本主義が消費者本位、読者本位になっていく傾向が資本主義の発展の一番高度な過程だとすれば、それはやはりサブカルチャー的な場所、読者が沢山ついてまた新しく活字の中に入ってくる読者も増えてくるところに主たる経済的根拠を求めするのは当然なんじゃないか。 吉本（2000:185-186）
- b. 以前にわたしは「重層的非決定」という訳の分からない言葉を使ったことがある。主旨は第一に、純文学と大衆文学といった二分法で文学作品を割り付けるのは、もはや不可能で通用しない。幾重もの層の重なりを純文学と大衆文学という二分法の代

わりに採用しなければ、現在では文学の実状に迫りえない時代になったという意味を持たせた。吉本(2000:5)

吉本は戦後(15a)で文学者の戦争責任を鋭く批判した。その後、吉本は編集責任者として1961年より思想・文芸誌の『試行』を発行し、既成左翼を痛烈に批判していった。(15b-d)は言語や認識の視点から、文芸・文化・国家・権力・政治・思想など、広い領域を論じている。いわゆる60年安保闘争から全共闘運動に至る活動家や政治青年をも吸引してきた。吉本に大きな変化がみられるのは、日本社会が70年代を境に大きく変容したことを認識して以後であり、著作(15)の中では(15e)以降である。

確かに、日本は1970年代に第1次産業・第2次産業を基盤とする農業や工業の従業者よりも第3次産業の従事者のほうが多くなり、消費資本主義国に変わっていく(詳しくは大塚1995参照)。この変化は「ダイエー」などの流通革命とあいまって進行した。(16a, b)は「大衆」と呼ばれる層が産業構造や社会的文化的活動において中枢を占めるようになり、旧来の「伝統的・正統的」なものが崩壊した段階でもはやマルクス主義や「左翼性」は意味をなさなくなったという。だからといって、舌鋒鋭い政治批判が変わるわけではない。(15g)はイラク戦争を仕掛けたアメリカ政府、憲法を犯してまでも自衛隊を派遣した日本政府、未熟な北朝鮮の金正日体制などを厳しく非難している。(17a, b)は日本が70年代の変節点を境に高度消費社会となり、欲望に支えられて消費過剰と多様なサブカルチャーが出現し、その中で新しい感性と知性が獲得されているという。多様なサブカルチャーの出現は、旧来の正義・権威・思想などがその正当性を疑われ、もはや多くの人の言動を支配しなくなり、人の関心や行動様式が多様化した結果でもある。この動きは本節の初めで述べた20世紀後半の世界の潮流とも呼応している。

吉本はサブカルチャーに対して高度か否か、正統的であるか否かのよ
うな判断基準を適用することはまちがいであり、社会総体の一部として

捉えるべきと考えている。言動の基礎にある価値観や世界観の変化に対応して多様なサブカルチャーが出現したとすれば、(17)が指摘するように、サブカルチャーをいかに理解・評価するかで物の考え方や世界観が大きく分かれてくるのも当然である。サブカルチャーとは、本来、ある文化を構成する下位文化で特定グループ（年齢・性・職業・地域など）により形成される各種の文化をさすが、しばしば正統的で規範となる「主流」のカウンターカルチャーとして「亜流」の下位文化をさす。状況や歴史を一括りにして語る場合、あるいは規範を重んじる場合、後者のサブカルチャーは無視されることが多い。しかし吉本としてはそれは社会の全体像を見誤るものであり、高度消費社会の日本で9割以上のものが中流意識をもっている現在、多様なサブカルチャーを無視することはできないという。後期の吉本はアニメーションの「宇宙戦艦ヤマト」や女性ファッション雑誌『アンアン』、マンガなどの大衆文化についても盛んに論じている。

吉本は(17a)で「いままでは週刊誌の活字にすら縁のなかった大衆が、活字の中に入ってきた」ともいう。確かに、週刊誌の種類はこの30年ほどの間にサブカルチャーの増大に対応して10倍以上にふえた。しかし、ふえた週刊誌の多くはマンガを含め、活字よりむしろ写真や絵図からなる。さらに、ふえた週刊誌の代償として書店では活字だけからなる本が占める書棚が減っている。その結果、この数年、多くの本屋が閉店したりビデオ・ショップに変わっている。小説などの文学は相対的に力を失い、むしろ活字離れの現象が起きている。ここには§3.2の末尾で述べた、テレビなどの映像の影響による表層的・即物的なものへの傾斜と平行して、言語や活字の弱体化がみられる。これを低俗と呼ぶか否かは別問題である。言語や活字の弱体化がそのまま主張や価値観の弱体化を意味するものではなく、筆者には旧来と異なる思考回路が生まれているように思える。マンガ・アニメ・テレビゲームやそこで生まれた日本製のキャ

ラクターやファンタジーが世界でも親しまれ、従来の日本発と異なるメッセージを提供している。ここでは言語や活字を中心とする旧来の思考回路に代わって、どのような思考回路が働いているのであろうか。人を納得させ、共感させる、何か新しい感性や主張・価値観が潜んでいるのかもしれない。

サブカルチャーの申し子として吉本ばなながある。ばななは若い女性たちの感覚的代弁者ともいわれ、古びた純文学の枠組みを打ち破っている。(18a b)はばななの最初の小説「キッチン」(『海燕』1987年11月号)からの引用である。

(18) a. 私がこの世でいちばん好きな場所は台所だと思う。

どこのでも、どんなのでも、それが台所であれば食事をつくる場所であれば私はつらくない。できれば機能的でよく使いこんであるといいと思う。乾いた清潔なふきんが何まいもあって白いタイルがぴかぴか輝く。

ものすごくきたない台所だって、たまらなく好きだ。

床に野菜くずがちらかっていて、スリッパの裏が真っ黒になるくらい汚いそこは、異様に広いといい。ひと冬軽くこせるような食料が並ぶ巨大な冷蔵庫がそびえ立ち、その銀の扉に私はもたれかかる。油が飛び散ったガス台や、さびついた包丁からふと目をあげると、窓の外には淋しく星が光る。

私と台所が残る。自分しかいないと思っているよりは、ほんの少しましな思想だと思う。

b. 「みかげさん、家の母親にピピッタ？」

彼は言った。

「うん、だってあんまりきれいなんだもの。」

私は正直に告げた。

「だって。」雄一が笑いながらあがってきて、目の前の床に腰を

おろして言った。「整形してるんだもの。」

「え。」私は平静を装って言った。「どうりで顔のつくりが全然似てないと思ったわ。」

「しかもさあ、わかった？」ほんとうにおかしくてたまらなそうに彼は続けた。「あの人、男なんだよ。」

今度は、そうはいかなかった。私は目を見開いたまま無言で彼を見つめてしまった。まだまだ、冗談だって、という言葉がずっと待てると思った。あの細い指、しぐさ、身のこなしが？あの美しい面影を思い出して私は息をのんで待ったが、彼はうれしそうにしているだけだった。

「だって。」私は口を開いた。「母親って、言ってたじゃない！」

「だって、実際に君ならあれを父さんって呼べる？」

彼は落ちついてそう言った。それは、本当にそう思えた。すごく納得のいく答えだ。

(18a)は「キッチン」の冒頭の部分である。少女マンガの主人公が台所の窓からひとり夜空を見ながら、心を落ちつかせてくれる、この世でいちばん好きな台所という場所のいろんな光景を空想している姿が浮かぶ。その「思い」は断片的なものであり、一部の語句や文を省いても物語りの進行にさほどの違いが生まれそうにない。しかし主人公にとってはその「思い」のひとつひとつが大事なのかも知れない。(18a)の最後の文ではその「思い」が「自分しかいない」という孤独感に浸るより「ほんの少しましな思想」と思っている。祖母に死なれて天涯孤独の身になった主人公「みかげ」は友人の「雄一」の家に同居させてもらうことになる。(18b)はそこの「母親」が実はおかまの父親であることを雄一から知らされた時の場面である。みかげは驚くが、それによって同居の身が変わるわけでもない。雄一はみかげの驚く表情をおかしく思いながらも、実の父親を母親として受け入れている。近代社会でタブー視されていたおか

まの父親など、多様なサブカルチャーを呑み込みながら、日常生活が坦々と過ぎていく。ばななの世界には、日常生活や感情の細部へのこだわりがある。やさしさや驚きの対象はあるが、怒りや反抗の対象はない。登場人物を通して、あるべき人間像や社会が語られるわけではない。個人が世界とつながる過程や個人と社会との葛藤はない。むしろ社会的制約のしがらみから抜け出ている。小説としてのプロットより登場人物のその場その場での感情の動きが大事にされて、若い世代の共感を呼び、癒しとなっている。この感性や「思想」は旧来の小説にみられなかったものである。

ばななの世界はその後の若い世代に引き継がれている。例えば130回芥川賞を最年少でダブル受賞した20歳の金原ひとみ（2004「蛇にピアス」）や19歳の綿矢りさ（2004「蹴りたい背中」）である。前者はタトゥーやピアスといった現代風俗の深みにはまっていく女の子を、後者は高校同級生の男の子に向けるいらだたしさにも似た愛情を描いている。いずれも広がりをもつ外の世界ではなく、等身大の身边につきまとう違和感やむなしさをつづっている。

日本におけるばなな後のこのような変化はほぼ同じ時期の1980年代にアメリカで始まったミニマリズムの文学とも呼応している。そこではイデオロギーや抽象観念を避け、ささやかな日常生活のディテールに心の安らぎを求めている。短編がふえて小説のサイズが小さくなり、描かれる世界や題材が小さいことから「ミニマリズム」（極小主義）と呼ばれている（『ミニマリズムの文学』について詳しくはその特集をしている『英語青年』（1988年1月号）参照）。

本節の初めに、価値観に変化をもたらすものとして4つの要因をあげたが、そのうち(15)-(17)の吉本には第3・第4の要因が強く反映し、(18)のばななには第1・第3の要因が反映している。吉本（2002）は娘に「政治的なことについては、いっさい書くな」と忠告し、娘は「よく実行し

ているようです」と書いている。親と娘の違いはともかく、4つの要因に共通している点は、旧来の社会文化状況の多くが崩壊、または変質し、それに代わる新しい「秩序」や精神的拠り所を探っているところである。

社会文化状況の変化は、価値観の変化と結合して地球規模で起きている。現在進行中の社会文化状況や価値観の変化にはいくつかの特徴がある。第1は社会と個人の関係である。個人の集まりが社会であり、その個人も社会により形成されるという一般論は従来と変わらない。しかし社会の構成そのものが変わりつつある。産業構造や交通手段の変化とともに都市化が進み、居住の移動がはげしく、かつての村落共同体は少なくなりつつある。隣人の顔も知らない。さらにはマスメディアの進展や多様なサブカルチャーの出現により個人の好みや関心が多様に分岐している。かつては地域や年齢などにより、かなり均質的なサブカルチャーが形成されたが、今日では1つの地域や年齢層に多様なサブカルチャーが共存している。

第2は人間が生来もっている欲望・上昇志向・創造性など、思考回路の変化である。高度資本主義社会が進展する過程で消費者の欲望が次々に満たされていき、従来から存在する金銭や利便性の価値観が相対的に高くなっている。経済的により豊かで快適な生活を送りたいという上昇志向の願望はごく自然である。§3.2の末尾で言語ヘゲモニーの下で多くの人が不本意ながら小言語から大言語に変わっていると述べたが、これも経済的に豊かで快適な生活を送りたいという願望から生まれているものである。しかし、目的を追求するあまり、そのための手段や過程がしばしば軽んじられることがあることを忘れてはならない。例えば高度消費社会において消費は欲望に応えるものであり、どのような欲望であれ、欲望や消費がある限り、生産は追いかけていき、生産をチェックする装置は見出しにくい。単純に消費者本位に消費者の欲望に応えるのが資本主義の発展過程であるとするなら、消費者のエネルギー源確保のために

産油国に戦争を仕掛けるのを止めることもできなくなる。またかつての情報交換の多くは顔を合わせて行われたが、今日では映像メディアだけでなく、E-mailや携帯電話に象徴されるように、無機質な機械を通して行われる。生身でないコミュニケーションによってわれわれが失っているものはないのか。われわれは情報社会の中であってあらゆる情報が入手できると思っているが、語りたものだけを語り、語りたくないものには沈黙し、人に語らせないというだれもがもつ自己規制をどれほど認識しているのであろうか。視覚野や聴覚野に訴える豊かな感性や表層的・即物的な情報と引き換えに、その背後にあって目に見えない姿や耳に聞こえない音を探ろうとする創造的思考を犠牲にしているところはないのか。現代社会の「豊かさ」や利便性は、自己増殖を繰り返す欲望を満たそうとして、理性や論理を飛び越えて情緒や信念と結びつく可能性はないのか。科学技術の進歩によってもたらされた「豊かさ」や利便性は今日その光の部分のみが強調されているが、影の部分が今後顕在化しないという保証はない。

第3は価値観と社会文化状況の関係である。これまで社会を支配していた正義・権威・思想などの正当性があやしくなった結果、例えば旧来の倫理観・対人関係・家族像・性愛などに関する多くの価値観が崩れ、それに代わる新しい価値観が生まれている。この傾向はテレビを含むマスメディアの進展により加速されている。多様なサブカルチャーの出現も多様な価値観が生まれた結果である。世の中が劇的に変わる時代には心の支えを宗教に求める者が多く、旧来の神に代わって新興宗教が台頭している。政治面では旧来の体制 反体制の概念が変質し、左翼 右翼の違いに大差がなくなり、イデオロギーの終焉をむかえているが、それに代わる新しい芽はまだ生まれていない。かつてヒトラーが政治理念の間隙を突いて台頭したが、今後新たにどのような政治イデオロギーが生まれてくるか定かではない。価値観はその時どきの産業構造・科学技

術・人間の思考（欲望・不安・理想）など多様な要素と結合しているが、それぞれに1対1の対応関係があるわけではなく、価値観や社会文化状況の各要素が一様に变化するわけでもない。

§ 3.1の冒頭で価値観の違いは政治の言説に最もよく現れると述べた。しかし政治そのものへの無関心が特に若い世代に広まっており、時期的に多様なサブカルチャーの出現に対応している。ここには価値観の比重に变化がみられる。すべての価値観が対等に存在するわけではない。何を重視するか、より大きな関心を何に寄せるかにより価値観にも大小の違いがある。今日では個人と社会とのつながりや個人と社会との葛藤より、むしろ今をいかに自由に生きるかが重んじられ、大きな価値観が政治から多様な文化現象に変わりつつある。先ほど吉本はばななが自分の忠告に従って政治的なことは書いていないと述べていたが、これは父親の忠告に従ったものというより、サブカルチャー世代の特徴かもしれない。この特徴は政治的なものや社会的なものにコミットしない1980年代後のミニマリズムの文学にも共通している。

価値観はその多様性や比重の大小、さらには重層性が時代により異なるとすれば、価値観が今後どのように形成されるか、その行方を予測することは困難である。日本には§ 3.1の末尾でみたように、「言説の秩序」としてあいまいさという特徴があるだけに、その行方はいっそう不確かである。だからといって、個人や社会の価値観は成り行きに任せればよいということにはならない。価値観は理念と結びつき、意識的に形成されるものと、個人の性向や環境から無意識的に形成されるものがある。例えば政治イデオロギーや宗教などと結びつく価値観は前者に属し、ファッションなどのサブカルチャーや言説の秩序などと結びつく価値観は後者に属する。価値観を形成する契機としては、意識的なものと無意識的なものと区別されるが、価値観が個人や社会において確立し、社会の慣行や制度に発展した段階では意識的なものと無意識的なものとの区別が

しばしば困難になる。ここでは社会文化状況の変化と価値観は相互に依存し、影響し合っており、いずれが原因でいずれが結果であるか判然としなくなる。その点、今後の価値観の行方は人間世界の行方そのものと重なってくる。

5 . おわりに : 談話分析の課題

今日、価値観が多様になり、幾重にも層をなしているとなれば、価値観が埋め込まれている言説はますます複雑になってくる。価値観や主張との関連で言説を対象とする談話分析には大きく次の課題がある。

第1は言説を正確に理解し、主張や語りの論理に矛盾や偽りがいないかを見定めることである。第2は言説に埋め込まれている価値観の重層性を明らかにすることである。第3は事態・出来事についての話し手の主張や価値観に賛否を表すことより、むしろ事態・出来事について話し手が「語る」ものだけでなく、「語らない」ものも指摘し、事態・出来事の全容を明らかにすることである。

議論の場では話し手は特定の価値観や主張を言説で展開する。聞き手はそれをただ拝聴するのではない。批判的に理解しようとなれば、聞き手自身も特定の価値観や主張をもち、話し手のそれと対決することになる。こうして話し手と聞き手が交替しながら議論が進行する。談話分析でも聞き手である分析者が自ら価値観や主張をもつことを要請される。しかし分析者の役割は議論の場の討論者より司会者に近い。言説の話し手は通例語りたいものだけを語り、語りたくないものを語らない。それだけに、言説で提起されている問題の全容を明らかにするためには、語られていないものも含めて交錯する価値観や主張を解きほぐすことが談話分析にとって最大の課題となる。

引用文献

- Chase, S. 1953. *Power of Words*. Harcourt, Brace & World.
- Foucault, M. 1970. *L'ordre du discours*. Gallimard. (中村雄二郎(訳)『言語表現の秩序』1972、河出書房)
- Gitlin, T. 1995. *The Twilight of Common Dreams: Why America is Wracked by Cultural Wars*. Henry Holt and Company.
- (ギトリン). 2002. 「亀裂走るアメリカン・レフト：退潮する左翼」『世界』(3月号)209-216.
- Graham, P., T. Keenan and A-M. Dowd. 2004. 'A call to arms at the end of history: A discourse-historical analysis of George W. Bush's declaration of war on terror.' *Discourse & Society* 13.2-3: 199-221.
- 金原ひとみ. 2004. 「蛇にピアス」『文藝春秋』(3月号)330-373.
- 河合隼雄. 1996. 「日本語と日本人の心」(大江健三郎・河合隼雄・谷川俊太郎『日本語と日本人の心』1-70. 岩波書店)
- . 2003. 「曖昧さと『私』」(河合隼雄・中沢新一(編)『「あいまい」の知』1-15. 岩波書店)
- 児玉徳美. 1998. 『言語理論と言語論 ことばに埋め込まれているもの』くろしお出版.
- . 2002. 『意味論の対象と方法』くろしお出版.
- . 2004a. 「意味分析の対象拡大により見えてくるもの：言語分析から人文社会科学へ」『立命館文学』285:14-29.
- . 2004b. 『意味分析の新展開 ことばのひろがりに応える』開拓社.
- 大塚英志. 1995. 「吉本隆明はいつ『ばなな』を生んだか」『文藝春秋』(4月号)166-174.
- Saussure, F. de. 1916. *Cours de linguistique générale*. Payot.
- 内田聖二. 2002. 「高次表現からみた日英語比較への一視点」『人間文化研究年報』(奈良女子大学)17:7-18.
- 吉本ばなな. 1987. 「キッチン」『海燕』(11月号). 『キッチン』(1988、福武書店、7-77に再録)
- 吉本隆明. 1975. 『言語にとって美とはなにか』勁草書房.
- . 1978. 『共同幻想論』河出書房新社.
- . 1981. 『心的現象論序説』北洋社.

- . 1995. 『わが「転向」』文藝春秋.
 - . 2002. 「“子どもの七光”も悪くない 合格点スレスレの父親史」『婦人公論』(87巻10号)30-33.
 - . 2004. 『「ならずもの国家」異論』光文社.
- 吉本隆明・大塚英志. 2000. 『だいたい、いいじゃない。』文藝春秋.
- 吉本隆明・武井昭夫. 1956. 『文学者の戦争責任』淡路書房.
- 綿矢りさ. 2004. 「蹴りたい背中」『文藝春秋』(3月号)374-427.